第2章
合同防災キャンプ 2017 実施内容

事前研修の開催

■開催日：平成 29 年 7 月 16 日（日）・17 日（月・祝）
■場所：東京都庁大会議場（東京都新宿区）

【16日（日）】

8:30 ～　普通救命講習受付
9:00 ～12:00　普通救命講習（未受講で、希望する者のみ）
12:00 ～　事前研修一日目　受付・開場
13:15 ～　開講式
東京都教育委員会挨拶　東京都教育庁 指導部長 増渕 達夫（実行委員長）
教員代表挨拶　都立山崎高等学校 主幹教諭 山下 剛先生
生徒代表決意表明　足立工業高等学校 第 2 学年 髙橋 涼さん

13:25 ～　オリエンテーション
合同防災キャンプ 2017 実行委員会事務局 挨拶
東京都教育庁 指導部 指導企画課長 建部 豊
合同防災キャンプ 2017 実行委員会事務局 説明
宿泊研修案内　株式会社 JTB コーポレートセールス
防災士資格取得説明　株式会社 防災士研修センター

14:30 ～　防災士養成講座（各講座 60 分）
[1]「避難と避難行動～東日本大震災、その時学校は～」
旧石巻市立門脇小学校 校長 鈴木 洋子先生
[2]「近年の自然災害に学ぶ」
防災情報機構 特定非営利活動法人 会長、元 NHK 解説委員 伊藤 和明氏

16:40 ～　事務連絡
17:00　終了

【17日（月・祝）】

9:00 ～　事前研修二日目　受付・開場
9:30 ～　事務連絡
9:40 ～　防災士養成講座（各講座 60 分）
[3]「地震の発生メカニズムと被害（＋地震防災）」
[4]「津波の発生メカニズムと被害（＋津波防災）」
東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター 教授 目黒 公郎先生
[5]「防災訓練（クロスロードゲーム）」
特定非営利活動法人 日本防災士会 常務理事 橋本 茂氏
[6]「災害と危機管理」
小さな命の意味を考える会 代表、元東松島市立矢本第二中学校 防災担当主幹教諭 佐藤 敏郎先生
15:20 ～　グループ協議（自己紹介、大川小学校に関する協議、グループ分け）
15:50 ～　事務連絡
16:00　終了

事前研修の開催

生徒代表決意表明及び教員代表挨拶

生徒代表
都立足立工業高等学校 ２年
髙橋　涼

つい先日、九州地方で大雨による甚大な自然災害が発生しました。そこで何人もの尊い命が犠牲になりました。また、近いうちに大きな地震も発生するのではないかと言われています。もし自分の身近な所で災害が起こったとき、どのような行動を取ればよいのか、そして私には何ができるのかと、考えることも多くなりました。

６年前、東日本大震災が起きてから、テレビ番組で被災地の様子が何度も放映されています。それらの映像を見るたびに、現在の現地は、今どのような状況なのだろうか、そして私たちにできること、私たちのすべきことは何だろうかと、いつも考えていました。

そして、被災地の中学生や高校生が、自分自身が被災しているにも関わらず、避難所の人たちや高齢者のお手伝いをしている様子が多く見られました。

私は、小学校５年生の時に、東日本大震災を体験しました。このとき東京は、震度５程度の揺れでしたが、私は授業を受けていて、急に揺れ始めたのでとても怖く、同時に何が起こったのか分からないくらい混乱していたことを覚えています。それから６年が経ち、高校２年生となった今、ただ怯(おび)えているだけではなく、周りの人たちを支えられるようになりたいと強く思いました。

昨年度、この合同防災キャンプに参加をした先生や先輩から「来年度、キャンプに参加をしたら？」と薦められていました。今年４月に担任の先生から、この「合同防災キャンプ２０１７」の募集について、お話がありました。私は自分の思いを実行に移すには今しかないと考え、すぐに申し込みました。

今年度は、８５名の都立高校生が、宮城県の被災地支援に参加し、現地の人々の生活や高校生の現状を知ることとなります。どのような状況であるのか、今はまだ想像しかできません。ですが、このような機会を頂けたことに感謝しながら、多くの事を学び、被災地の復興支援にできる限りの貢献をしたいと考えています。

また、今回の合同防災キャンプで、防災士養成講座を受講し、防災士の資格取得を目指します。今後、私たちの住む地域で災害が起きたとき、防災のリーダーとして、地域の方々や高齢者を多く助けることができるよう、資格取得に向けて励みたいと思います。

私たちは、この合同防災キャンプを通して、体験したこと・学んだこと・感じたことを学校の仲間をはじめ、多くの人に伝えていきます。

防災リーダーとして、東日本大震災を風化させず、災害に対する意識や心構えを多くの人々と共有できるよう、行動したいと思います。

教員代表
都立山崎高等学校
山下　剛

私たちの住む東京は、今後３０年の間に大規模な災害が発生する確率が極めて高い地域だということは、多くの都民の知るところです。過去、東京で発生した大規模な地震災害は、大正１２年の関東大震災までさかのぼります。今では１００年前の状況を知る人々も少なくなり、写真や書籍での記録でしか知ることができません。また、当時と比べて東京の都市構造が大きく変化していることから、新たな都市災害について備えなければならない現状があります。

私は、最近ある言葉を聞いて「はっ」と思うことがありました。それは、私たちが普段よく耳にする「防災（ぼうさい）」ではなく、「忘れる」という漢字を用いた「忘災（ぼうさい）」です。

この言葉は、私たちや社会全体が、時が経つにつれ被災者や被災地域について、だんだん記憶が薄れ、他人事のようになってしまうということを懸念した言葉だと思います。

東日本大震災から６年経った今、テレビなどのマスメディアでは、復興の一部しか報道されません。今回、宮城県の被災地を訪問し、現地の「今」を知り、現地の方々と積極的に交流し、自分の考えを参加者とともに語り合いたいと考えています。そして、この体験を学校に戻り、教職員、生徒、保護者及び地域住民に伝えていくことが、私たちの使命であると考えています。語り継ぐことで、「わすれる忘災」ではなく、「ふせぐ防災」へと私たちの意識を変えていかなければいけないと強く感じています。

７月に入って九州北部で記録的な大雨の影響で、河川の氾濫や土砂災害による甚大な被害が発生しました。いまだ生存が確認されていない住民がいるなど、報道を通して災害の悲惨さが伝わってきます。その中で、福岡県の「防災士」が中学校の避難所で、災害ボランティアをまとめ、救援物資を仕分けするなど避難生活を支えている様子が報道されました。その映像から、改めて今回の合同防災キャンプで防災士の資格取得を目指す意義と覚悟を考えさせられました。

最後になりますが、合同防災キャンプの「合同」は、都立高校の垣根を越えて交流することで、考えや思いを語り合い、互いに高め合う、かけがえのない学習の場にすることだと思います。この貴重な機会を得られたことに感謝し、教員として東京都の防災教育を推進していく決意を胸に刻み、被災地の復興支援に全力を尽くしていきたいと思います。

事前研修の開催

防災士養成講座（講義・演習）

事前研修では、講義・演習形式で６講座を実施。自然災害や防災に関して学び、宿泊研修で訪問する宮城県における東日本大震災の被災状況等を事前に学習しました。

[1]「避難と避難行動～東日本大震災、その時学校は～ 」

講師／旧石巻市立門脇小学校 校長　鈴木 洋子先生

鈴木先生から、はじめに「３月１１日を生きて～石巻・門脇小・人びと・ことば～」（『宮城からの報告』製作委員会）の映像を紹介いただきました。当時の門脇小学校の児童が、東日本大震災とその後の生活を自らの言葉で語る映像に、参加生徒は、６年前の小学生であった自分、そしてそのときに体験した東日本大震災を思い出したように視聴しており、合同防災キャンプの事前研修にふさわしいスタートとなりました。

次に、石巻市の地理や歴史、門脇小学校の被災状況等を写真を交えて解説していただいた後、震災前に取り組んできた「子供の命を守る」防災教育（避難訓練、引き渡し訓練）や日常的な生活指導と、それが実を結び、学校にいたすべての児童を津波から避難させた３月１１日の避難行動について説明していただきました（避難ルートについては、宿泊研修の一日目に実際にたどりました。）。

また、石巻における高等学校の被災状況（使用できなくなった体育館、がれきが山と積まれたグラウンド等）や、避難所の生活における生徒の活躍（校舎やトイレ等の清掃、救護所の手伝い、支援物資の仕分けや配給、幼稚園児の世話等）を説明していただくことで、被災時に高校生が直面すること、また学校や教員として取り組んでいかなければならないことに気付かせていただきました。

[2]「近年の自然災害に学ぶ 」

講師／防災情報機構 特定非営利活動法人 会長、元 NHK 解説委員　伊藤 和明氏

「夏休み子ども科学電話相談」の回答者も務めていた伊藤氏より、地震や津波のメカニズム等について、科学的視点を交えながら分かりやすく説明していただきました。

「プレートと地震活動」、「プレートと地震の震源分布」等の基本的な地震発生のメカニズムの説明の後、同じ地震でも様々な顔があり多様な被害があることを、御本人が被災地調査の際に撮影した各地の写真等により説明していただくことで視覚的にも理解できました。

東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）の被害の一例として、校舎２階の天井まで津波が浸水した中浜小学校（宮城県山元町）において、生徒等が屋上や屋根裏部屋でどのように一夜を明かしたかを説明していただきました。参加者は学校という身近な事例であることから、自らも起こりうる内容として真剣に耳を傾けていました。

また、３０年以内に７０%の確率で発生すると言われている首都直下地震や、地球温暖化の影響により増加、深刻化する気象災害といった目前に迫る災害の危険について説明していただくことで、参加者の防災意識は喚起されました。

[3]「地震の発生メカニズムと被害（＋地震防災）」・[4]「津波の発生メカニズムと被害（＋津波防災）」

講師／東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター 教授　目黒 公郎先生

事前研修二日目は、まず午前中に、地震と津波の発生メカニズムと被害及びその防災対策に関して、目黒先生による２時間の講義がありました。

東京大学や放送大学で教鞭（べん）を執られている目黒先生が、「あえて東大で話すのと変わらないレベルで講義します。」と冒頭でおっしゃったとおり、講義の内容は、物理や地学の理論に基づいた地震や津波の発生メカニズム、災害のメカニズム、被害のメカニズムなど多岐に渡り、高校生には少し高度と思われる内容でしたが、防災士として必要な知識を学ぼうと、懸命に耳を傾けていました。

地震の被害に直結する地震動の性質と決定要因の関係を学習する場面で、「マグニチュードが大きい地震の場合、揺れの最大振幅、継続時間、周波数の特性はそれぞれどうなるか？」という質問が生徒に出されると、参加生徒は迷いながらも、手を挙げ回答に挑んでいました。

講義の中で特に印象的であったのは、災害現象について、INPUT（地震等のハザード）→ SYSTEM（受ける社会の特性）→ OUTPUT（被害等の出現する現象）という反応で整理した考え方であり、自然環境特性、社会環境特性、時間的要因などにより被害が変わること、災害の軽減とは、この反応の拡大連鎖を小さい時にいかに断ち切るかに懸かっていることを学習しました。

また防災対策の基本は、正しい知識と、それに基づき起こりうる災害をイメージする想像力であるという熱のこもった言葉に、防災における知識の重要性を、改めて気付かされました。

[5]「防災訓練（クロスロードゲーム）」

講師／特定非営利活動法人 日本防災士会 常務理事　橋本 茂氏

研修会場でできる防災訓練として、橋本氏が「クロスロード」※を合同防災キャンプ参加者向けにアレンジしたグループ演習『身近な事例で「身を守ること・災害対応」を考えましょう』を行いました。

これは、「家族で老舗旅館に宿泊中に地震が起き、部屋の壁に亀裂が入った。屋外の車に避難するか、又は、部屋に留まるか。」といった災害時の具体的な場面を想定した質問に、Yes（質問例では車に避難）か No（部屋に留まる）のどちらかで答え、なぜその答えを選んだかをグループ内で協議するという演習です。

この目的は、唯一の答えを知ることでなく、協議を通して様々な答えの可能性を知り、その中でより良い行動は何かを考えることです。

参加者は、「余震が来るかもしれないから車に避難する。」、「すぐ外に出るのではなく、まずはその部屋から移動する。」など、それぞれの意見を述べて協議を行いました。演習は５問行いましたが、グループ内で答えが一致するもの、意見が分かれるものなど様々な結果となりました。

協議の後に、橋本氏から「妥当解」とされる回答を解説していただき、地震などに遭遇した時は、次に何に警戒すべきかを考えること、原則を押さえながらも固定観念にとらわれず、その場・そのときにどうすれば最善かを常に想像することが重要であることを参加者は理解しました。

※　阪神・淡路大震災で神戸市職員が経験したジレンマの事例を基に、プレイヤーがそれらのジレンマを自分の問題として考えることで災害対応を考える「防災ゲーム」

[6]「災害と危機管理」

講師／小さな命の意味を考える会 代表、元東松島市立矢本第二中学校 防災担当主幹教諭　佐藤 敏郎先生

宮城県の中学校教員であった佐藤先生から、東日本大震災が発生した時に教鞭を執られていた女川町立女川第一中学校（現女川中学校）とその後に勤務された東松島市立矢本第二中学校における生徒たちの心情とその変化、そして生徒たちと一緒に進めてきた取組について御紹介いただきました。

宿泊研修で訪問する女川町は、建物の８割、人口の１割が被害を受けており、学校はそのような状態で震災直後の４月に再開されました。家族や友達を亡くした生徒たちに思いを吐き出してもらおうと実施した俳句を作る授業の中で、生徒たちが言葉そして自分の心を探して紡いだ俳句を紹介すると、参加者は大きく心を動かされていました。

このほか、女川町で生徒が発案した取組として津波の到達点に 21 基の石碑の建立を進めている「いのちの石碑」や、東松島市で「自分は生きていていいのだろうか？」という葛藤を乗り越え、生徒たちが行っている「語り部」など、自分たちと年が近い方々が３．１１を無駄にしないために未来に向けて行っている活動を伺いました。

そして話は再び震災直後に戻り、スライドに映されたのは、３月19 日に行われた女川第一中学校の卒業式で微笑んでいる佐藤先生。しかし佐藤先生から、当時、石巻市立大川小学校の６年生であった娘さんが、その前日に火葬されたという話が語られると、参加者は身を引き締め話に聞き入りました。

３月 11 日、大川小学校では、佐藤先生の娘さんを含む児童・教員 80 名以上もの命が津波で失われました。この命が、なぜ失われてしまったのか、遺族として、また学校関係者として佐藤先生が考え続けてきたことをお話しいただく中で、組織における意思決定の難しさと大切さ、普段の生活の中での信頼関係、防災を単なる知識や情報でなく「習慣」にすることが、命を救う本当の防災になることを教えていただきました。

震災遺構として保存されることになった大川小学校の校舎について、佐藤先生から「なぜ保存することになったのか」、「保存決定に５年かかったのはなぜか」、「誰のために遺すのか」などの問いが投げかけられ、参加者は「家族などを亡くされた方が校舎を見るとつらいため、その人たちのことをおもんばかって時間がかかったのではないか。」、「広島の原爆ドームも、現在では戦災を忘れないためのシンボルとなっており、校舎を残すのは同様に良いことだと思う。」などの意見が挙がりました。

最後に、「防災とは、『ただいま』を必ず言うこと。」という佐藤先生の言葉に、大災害は当たり前の日常を奪ってしまうものであること、その日常を守るために防災があるということを、参加者は改めて胸に刻みました。

事前研修の開催

グループ協議

グループ協議では、防災士養成講座［6］「災害と危機管理」における佐藤敏郎先生のお話を受けて、大川小学校での痛ましい事故はどうすれば防ぐことができたと思うか、８月に被災地で行う宿泊研修ではどのようなことを学びたいかを、12 の班に分かれて話し合いました。

二日間の事前研修で防災士意識が一段と高まった参加者たちは、速やかに円になって協議を開始。各々の自己紹介に続き、「大川小学校でも、津波を想定した避難訓練をしていれば被害は防げたのではないか。」、「大川小学校での被害はなぜ起きてしまったのかを知りたい。」、「防災の知識だけではなく、被災地の方々の復興に向けた取組等をしっかりと学びたい。」、「ボランティア活動について、具体的に今どのようなことが求められているのかを知りたい。」等、それぞれの意見や意気込みを述べ合いました。

また、宿泊研修の一日目に行われる交流活動（現地高校生・大学生とのグループワーク等）について、班ごとにどちらのコースを希望するかの協議も行いました。

合同防災キャンプでは、他校の教員・生徒との班編成となります。初対面であっても短時間でコミュニケーションを深めること、スムーズに協力体制を築き、各自の役割を確認し合うことが求められます。防災リーダーとして、多様な年代・立場の人たちの声を聞き、まとめていく力が、こうした体験を通じても鍛えられます。